

# 白いぼうし (あまんきみこ)

## 一 作者と作品について

本名、阿萬紀美子。一九三二年（昭和六年）、旧満州国撫順市に生まれる。新京（現在の長春）・大連市に移り住み、敗戦を機に帰国する。帰国後、大阪府立桜塚高等学校を卒業、卒業と同時に結婚する。その後、日本女子大学児童学科通信教育部に入学、与田準一と出会い、与田の勧めで坪田譲治主宰の「びわの実学校」に「くましんし」を投稿し評価を得て、同人になる。

一九六八年、「びわの実学校」発表作品を集めた『車のいろは空のいろ』を出版し、第一回日本文学協会新人賞、および野間児童文学推奨作品賞を受賞。その後の受賞作品は、一九八一年、旺文社児童文学賞『こがねの舟』、一九八二年、小学館文学賞『ちいちゃんのかげおくり』、一九九〇年、ひろすけ童話賞『だあれもない』、二〇〇四年、日本絵本賞『きつねのかみさま』など多数。小学校教科書に『白いぼうし』、中学校教科書に『雲』など、教科書へ掲載され、教材となった作品も多い。二〇〇一年 紫綬褒章を授受。

作品の特徴は、「ちいちゃんのかげおくり」や「おはじきの木」など戦争を描いたものもあり、旧満州で育ち、帰国した経緯、幼少期の経験の影響が感じられる。自身が好きな宮沢賢治の世界とも通じ、日本的なファンタジー作品を多く生み出す。日本の風土や文化に根ざした

## 大橋 実華、宮川 恵実子

情緒と親しみやすさが感じられ、上品なユーモアにも包まれて、どこまでも優しい独特な世界観が漂う。母親的な優しさ、温もりと、どうしようもない切なさが共存し、悲劇の中にある本質を、鋭く静かに描き出す視点が、あまんと作品の特質と言えるだろう。

現在は京都府長岡京市に在住し、『新竹取物語』を構想、執筆中であり、発表が待たれている。

## 二 叙述について

「これは、レモンのにおいですか。」

「これ」は、指示語であり、話し手自身やその近くにあるものを指し示す。「これはなんですか」とたずねるとき、たずね手は、手にそれを持つか目の前にあるそれを指さして問う。問われた方は、指し示されたそれを確認しない限り答えることはできない。つまり、「これ」は、対話する複数人にとって共通のものでなければならぬ。しかし、ここでは、お客の紳士がたずねた「これ」は目で確認することができな



「いにおい」である。本来なら、「このにおいは、なんですか」と聞くべきであるが、ここではお客にとっても松井さんにとっても「これは共通理解しているものであり、車の中はそのにおいで満たされている状態であったため、お客がそのような聞き方をしたと考えられる。

「レモン」は、ミカン科の果物である。「レモン」と、あとに出てくる「夏みかん」という二つの言葉により、すっぱいにおいや黄色い色が想像でき、初夏の明るくさわやかな空気と香りに包まれる印象を与える。

きのう、いなかのおふくろが速達で送ってくれました。

「いなか」とは、都会から離れた土地のことである。つまり、松井さんが住んでいるところは都会だと考えられる。

「おふくろ」とは、母親のことであり、主に男性が母親を親しんで呼ぶ語である。松井さんと松井さんのお母さんは、別々に暮らしているもお互い気にかけている関係であることがわかる。「おふくろ」の語源として、様々な説があり、主に以下の3つのことが考えられる。

①「お」は接頭語で、母親は金銭や貴重品を袋に入れ全てを管理していたところから「ふくろ（おふくろ）」と呼ぶようになった。

②胎盤や卵膜などの胞衣や子宮を「ふくろ」と呼んでいたことから、母親そのものも言うようになった。

③子どもは、母親の懐で育つため、「ふところ」が詰まって「ふくろ」となり、「おふくろ」になった。

「速達」は「速やかに届けること」という意味である。つまり、「おふくろ」が松井さんに新鮮な夏みかんを早く届けたいという思いが読み取れる。また、「速達」や前後の文中の「もぎたて」「いにおい」とい

う言葉が「夏みかん」の新鮮さを強調させる。

緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしが、ちょこんとおいであります。

「緑がゆれている」とあるが、緑とは色の名称であるから、色が揺れるというのは、本来おかしい。緑色をした何かが揺れているのであり、ここでは柳の「葉」が揺れているのであろう。柳は枝も細い木である。風で枝がゆれることは十分考えられる。枝ではなく葉がゆれているというのは、それほど弱い風、微風の下と説明できると思う。では「葉が揺れている」と表現することと、どう違うだろうか。葉という言葉では何色かが判らない。柳の葉を緑と表現することで、読み手の描く情景に色彩的効果を生んでいる。そしてそれは、後に続く帽子の色「白」と呼応し、緑と白の色彩的コントラストが生まれ、鮮やかな初夏の情景を読み手に想像させる効果を生んでいると思う。

「かわいい白いぼうし」とあるが、かわいいとは、どの様な帽子だろうか。例えば「かっこいい帽子」なら、何となく男性紳士用の中折れつまみ型のシルクハットやテンガロンハットのような帽子を想像するのではないだろうか。かわいい帽子とは、やはり女性用を想像する。それもつばの広い大きな帽子なら、多くは婦人用、大人用のものであるから、「素敵な白い帽子」や「美しい白い帽子」という表現の方が相応しいだろうし、「かわいい」という言葉は、何となくこんもりと丸く、つばの小さな、年齢的には小学校低学年位までの女の子がかぶるような帽子が想像される。

「ちょこんと」については、後述とする。

(せつかくのえものがいなくなっていたら、この子は、どんなにがっかりするだろう。)

「せつかく」とは、「力の限り尽くすこと」「力の限り尽くさなければならぬような困難な状態」の意味で名詞である。しかし、「せつかくお誘いいただいたのに」や「せつかく来たのに」など副詞として用いられることも多い。他に、「せつかくの休みに雨が降る」など、たまにしかない機会が無駄になる事態を惜しむ気持ちを表わすこともある。「せつかくの」があることにより、子どもが一生懸命つかまえてとつたのに、松井さんが帽子を取ったことにより、ちようが逃げてしまつて残念だという気持ちが強調される。

「えもの」は、「戦いなどで奪い取つたもの」という意味であり、子どもにとつても重要なもの、つかまえるものという解釈ができる。ここでの「えもの」は「もんしろちよう」のことを指している。

「この子」とは、ちようを捕まえ、帽子を被せておいた男の子のことである。

「どんなに」は、形容動詞「どんなだ」の連用形である。はっきりしないそのものの状態・性質・程度などを想像しようとするさまである。子どもがとつてもがっかりすることを想像し、子どもがかわいそうだと思う松井さんの気持ちが伝わる。

まるで、あたたかい日の光をそのままそめつけたような、みごとに色でした。

何色とは表現されていないが、読み手に美しい夏みかんの姿を自由に想像させることができる。「あたたかい日の光」が夏みかんの色の特徴を表現しており、色が濃く、太陽の光のようにきらきら輝いている

ことが想像できる。また、松井さんと松井さんのお母さんの優しい心と温かさが「あたたかい日の光」と表現されているとも考えられる。

「そめた」ではなく、「そめつけた」が使われているのは、薄れたり、消えたりすることのないようにしっかりと色をしみこませたという強さを感じる。

「みごと」は、際立ってすぐれていることである。

車にもどると、おかつぱのかわいい女の子が、ちよこんと後ろのシートにすわっています。

「車にもどると」とあるが、車に戻つたのは誰か、松井さんである。ここでは主語が書かれていない。この部分が、「松井さんは車にもどりました。すると、おかつぱの…」と書かれていてもよいだろう。また、車にすわるためには「ドアを開ける」や「車に乗り込む」などの一連の動作が必要であるが、それらの描写や説明も省かれ、単に「と」という接続助詞で文が繋がっている。このことよつて、時間的に短い一瞬で場面が転換していると思う。少女が急に表れた印象を呼び起こし、読み手をファンタジックな世界へと誘う効果を生んでいると思う。

「おかつぱ」とあるが、おかつぱとは前髪を額に垂らし切り下げ、後ろ髪を襟足辺りで真っ直ぐに切りそろえた髪型の事である。主に女性の髪型のことであるが、大人の女性に使う場合は、英語でポブまたはポブカットと言うことが多い。同じ髪型であっても「ポブカットのかわいい女の子」であれば、少なくとも中学生以上位の年齢の女の子を想像するのではないだろうか。おかつぱは、少女の髪型としての言葉である。因みに、こけしの髪型は、おかつぱが多い。女の子の髪型がもし「おさげ(左右に分けて三つ編みする少女の髪型)」ならどうだ

ろうか、おさげは人の手が入った髪型であるから、おさげのかわいい女の子は何となく現実的となり、おかつばの方が異次的ではないだろうか。おかつばの女の子は日本的ファンタジーという、あまん作品のイメージを象徴する存在と言えるかもしれない。

#### ▼「ちよこんと」について

以上、二箇所に使われている「ちよこんと」という言葉を、類義語へ置き換える。

- ①ぼつんと…孤独感、周りに何もない広い場所がイメージされる。
- ②ぼんと…無造作な感じ。動作が速く、意識が薄い。
- ③ちよいと…②と同様に無造作な感じに加えて、存在が小さい感じがする。
- ④ちよこつと…③と同様に存在が小さい印象だが、③よりも動作が

丁寧で多少の意識を伴った感じがする。

⑤そつと…動作が静か、丁寧で、最も意識的。

これらの類義語への置き換えにより、意味と印象の変化を考察し、改めて「ちよこんと」の意味と印象を整理する。「ちよこんと」とは、小さなものが、丁寧な動作によって、動作主の多少の意識を伴った後に、そこそこの広さのある空間の中に、存在する、というイメージを想起させる言葉であると言えるのではないだろうか。

「緑がゆれているやなぎの下に、かわいい白いぼうしが、ちよこんとおいてあります。(二二頁二行目)」では、「柳の木の下にはある程度の空間があり、帽子は小さく、蝶を閉じ込めるとい意識を伴って置かれていた」ということであり、「車にもどると、おかつばのかわいい

女の子が、ちよこんと後ろのシートにすわっています。(一四頁二行目)」では、「女の子の両側にはある程度の空間があるということから、座った椅子は一人掛けではなく車の後部にある長椅子であり、急いで飛び乗って無造作にただ座ったのではなく、丁寧にそつと腰かけた」ということを、読み手に想像させると言えると思う。

水色の新しい虫取りあみをかかえた男の子が、エプロンを着けたままのお母さんの手を、ぐいぐい引っぱってきます。

「水色の新しい虫取りあみ」とあるが、水色なのは、持ち手なのか、網なのか、ここでは、網が水色と考えた。「新しい」とあるが、どこから新しいと判断したのだろうか。色のついた網は、色の無い網よりも、新しいことがわかりやすい。新しいという言葉からは、男の子が最近虫取りに興味を持ち、虫取り網は買ってもらったばかりだということ が想像される。

「かかえた」とあるが、「かかえる」とは「腕の中に持つ、だく」という意味である。つまり、「持った」なら手で(片腕で)持っていることも考えられるが、ここでは、網が腕で持つか抱かなければならないものである、ということから、男の子にとって大きい、ということが分かる。小さな男の子が大きな網を縦にして腕で抱くように持っている様子を表している。

「エプロンをつけたままのお母さん」とあるが、普通遠くまで行く時はエプロンを外すので、ここから家が近いことが分かる。「つけたまま」とあるが、「まま」とはなりゆき任せの意味であるから、男の子に呼ばれた時に既につけていて、なりゆき任せに外す暇もなく慌てて出てきた様子が分かる。

「ぐいぐい」とあるが、これは「しきりに強く引いたり、押ししたりする様子」を表す副詞である。ここでは、男の子主導にお母さんを強く引っ張っているという意味となり、男の子はお母さんに見て欲しいとはやる気持ちであるが、お母さんは昼食の準備中で忙しく、嫌々、無理やり連れて来られているということが分かる。「引っぱってきます」は「引っぱっています」とは違い、松井さんの方に、段々と徐々に近づいてくる様子を示す。

男の子は最近虫取りを始め、大きな新しい網を買ってもらったばかりである。蝶は、男の子にとつて、もしかしたら初めて取った虫かもしれない。男の子は、それをお母さんに見て欲しくて仕方ない気持ちになり、呼びに行き、お母さんは昼食準備で忙しい中を無理やり連れて来られ、近づいてくる光景を、読み手に想像させる。描写が詳細で、臨場感あふれる一文である。

早く行ってちょうだい。

「早く」という言葉から、女の子があせっている様子がわかる。

「ちょうだい」は、(補助動詞の命令形のように使つて、)相手に何かしてもらうのを促す気持ちを、親しみの気持ちをこめて言う語である。女性が上品な印象や気取った印象を与える時に使つたり、子どもが何かおねだりする時に使つたりすることが多い。

白いちようが、二十も三十も、いえ、もつとたくさん飛んでいました。

「いえ、もつと」とあるが、これはまるで言い直した時の話し言葉をそのまま書いたかのような文章のようである。「いえ」は「いいえ」が詰まった言い方、つまりそれまで述べた事を否定する意味を持つ。

ぱつと見た時は、二十か三十と思つた蝶の数が否定され、「もつとたくさん」だったのである。二十か三十でも、動く蝶の数を数えることはおそらく不可能である。「二十も三十も」という言葉で、蝶の数がとても多いことを十分に表現したつもりだった筆者が、わざわざ更に言い直し、たくさん蝶だったことを強調し印象づけている。蝶の数は、四十か五十か、数えきれないほど「たくさん」だったのである。

それは、シャボン玉のはじけるような小さな小さな声でした。

「それ」とは、その前の「よかつたね」「よかつたよ」という会話を指している。「はじける」とあるが、はじけるとは「中身がいつぱいになって裂けて割れる、勢いよく飛び散る」という意味である。栗の実がはじける、ポケットがはじける、などの用例がある。ここでは、シャボン玉がはじけるのであるから、中身は空気である。すなわち、中身は目には見えない、無いに等しい。空気だから、勢いよく飛び出る様子は見えないし、本来音のしないものである。

例えば、石鹸で手を洗っている時に手のひらにできた泡が割れて消えたとしても、その時に音を感じる人は少ないだろう。泡のはじける時に少なくとも無意識の状態では音は聞き取れない。よほど注意して耳を凝らさないと感じられない。「シャボン玉のはじけるような」とは、その会話が、少なくとも無意識の状態では感じられない、よほど注意を凝らさないと人間の耳では聞き取れないほど小さいということである。シャボン玉のはじける音を自分が聞いたことがあるかどうか、ない場合はどういう状態であれば聞けるのか、考えてみたい。

以前、水琴窟の音を聞こうとして、竹筒の穴で耳を澄ませた時、長い時間が過ぎると何か美しい音が聞こえたように錯覚した。後で聞く

と、実際は手水鉢に水が落ちてなかったもので、そういう時は、音はしないそうである。

ここもファンタジックな世界を想起させる、あまん作品の特徴を示す場面である。

### 三 考察

「白いぼうし」はファンタジーの要素を多くもち、現実の世界と非現実の世界との、二つの世界から成っている。ファンタジーの特徴が最も表れるものとして、表現上のしかけがある。「白いぼうし」の主なしかけは、「におい」と「色彩」が考えられる。夏みかんの「におい」といった嗅覚をイメージする言葉、「白い帽子」「もんしろちようの白」「並木の緑」などの色彩をイメージする言葉などこれらの視覚や嗅覚の五感に訴える表現は、さわやかなイメージの世界を創り出し、読み手を不思議な世界へ誘い込む。また、夏みかんのイメージが物語の中心となり、そのにおいは物語を一貫して流れている。夏みかんは自然や優しさの象徴であると考えられることもできる。

本作品には、松井さんとお母さん、松井さんとお客、男の子とおかあさん、松井さんと女の子など、初夏のさわやかな陽光の中での様々な触れ合いが描かれている。物語の中でそのような触れ合いに接し、温かさを感じることができる。松井さんの優しさを中心に、現実と非現実が交錯する不思議な世界が描かれている。物語中に出てくる白い帽子は、都会という「反自然」から自然界へと抜ける通路の役割を果たし、不思議な女の子は非現実世界への案内人の役割を果たしているのではないだろうか。

### 女の子の正体

この物語には、女の子がいつの間にかタクシーに乗っていて、いつの間にかタクシーから消えてしまった場面がある。はたして、女の子の正体は何なのか疑問に感じる。そこで、一つの解釈として、女の子はもしかして白い帽子の中にいたちようではないかと考えられる。女の子がちようだと考えられる理由として、以下のことが考えられる。

- ・ 松井さんがもんしろちようを逃したあとに女の子が現れている。
- ・ 女の子が疲れているのは、男の子に追い掛け回されて捕まえられそうになったから。
- ・ 菜の花横町に行くことを要求しているのは、菜の花横町がちようのすみかであり仲間のところへ行きたい。
- ・ 男の子が戻ってくると、女の子は「後ろから乗り出して」「せかせかと」「早く、おじちゃん。早く行ってちようだい。」と、言った。それは、ちようを捕まえた男の子から逃げたかったから。
- ・ 女の子が「道にまよったの。行っても行っても、四角い建物ばかりだもん。」と言っているのは、野原で育ったちようなのでこの辺りのことがわからない。
- ・ 女の子が急にいなくなったあと、松井さんはたくさんのちようを目撃している。
- ・ 「よかったね。」「よかったよ。」「よかったね。」「よかったよ。」と、繰り返されているのは、女の子(ちよう)と女の子の友達の会話で、「逃げる」ことができよかったね」「逃げる」ことができよかったよ」と言っている。

また、女の子がちようではない可能性として考えられる理由は、タクシーが走っている最中に女の子が突然消えるのは、現実的な存在と

して考えられないからである。少なくとも、女の子は非現実的な存在だと考えられる。

「実際のところ女の子がちょうかどうか判断することはできない。読み手の想像によって異なり、様々な解釈ができるのではないかと考える。」

